

ルバイヤート

RUBA'IYAT

オマル・ハイヤーム 'Umar Khaiyam
青空文庫

まえがき

（）に訳出した『ルバイヤード』（四行詩）は、十九世紀のイギリス詩人フィツジエラルド Edward FitzGerald の名訳によつて、歐米はもちろん、広く全世界にその名を知られるにいたつた十一一二世紀のペルシアの科学者、哲学者また詩人、オマル・ハイヤーム [Omar Khayyām ('Umar Khaiya_m)] の作品である。

フィツジエラルドが、一八五九年にその翻訳を自費出版で初版わざかに二五〇部だけ印刷した時には、若千 （じやつかん）を友人に分けて、残りはこれを印刷した本屋に一冊五シリングで売らせたのであつ

たが、当時はいつこうに人気がなく、いくら値を下げるても買手がつかないので、ついには一冊一ペニイの安値で古本屋の見切り本の箱の中にならべられる運命となつた。出版してから三年ばかりのこと、ラファエル前派の詩人口ゼツティの二人の友人が、散歩の途次偶然、^{ほこり}埃に埋もれたこの珍しい本を発見して、彼にその話をした。ロゼツティは同志の詩人スワインバーンと一緒に^{のぞ}件の店に出かけて行つて、ちよつとその本を覗いただけで直ちにその価値を認め、おのおの数冊ずつ買って帰つた。翌日彼らは友人に贈るためになお数冊買うつもりでまたその店へ行つたが、店の者は前には一冊一ペニイだつたのを今度は二ペンスだと言つた。ロゼツティは怒りと^{かいぎやく}諧謔をませた抗議口調でその男に食つてか

かつたが、結局二倍の値段で少しばかり買って立ち去つた。それから一、二週間後には残りの『ルバイヤート』の値段は一躍一ギニイにも跳ね上つたといふ。

このように数奇な運命をたどつたフィツジエラルドの翻訳は、ラファエル前派の詩人たちの推称によつてようやく識者の注目をひくにいたり、初版後九年を経た一八六八年に第二版、それから四年後の七二年に第三版、また七九年には最後の第四版が出版され、フィツジエラルドの死後『ルバイヤート』はますます広く読まれるにいたつた。ことに十九世紀末から今世紀の初めにかけてオマル・ハイヤーム熱は一種の流行となつて英米を風靡し、その余波は大陸諸国にも及んだ。ロンドンやアメリカには『オマル・

ハイヤーム・クラブ』が設立され、またパリでは彼の名が、酒場の看板にまで用いられるほどであった。フイツジエラルドの翻訳はいろいろの体裁で翻刻され、各国語に訳された。さらにまたフイツジエラルドのこの奔放ほんぽうな韻文訳以外にも、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、イタリア語等への直接ペルシア語からの韻文や散文の訳が数多く試みられた。わが国でも、明治四十年（一九〇八年）にはじめて蒲原かんばら有明ありあけがフイツジエラルドの訳書中から六首を選んで重訳紹介して以来、今日までに多くの翻訳書が出た。今ではもうフイツジエラルドの名訳はそれ自身英文学のクラシックに列せられている。オマル・ハイヤームの名はこうして世界的なものとなつた。

詩聖ゲーテはその有名な『西東詩集』の中で、人も知ることく、ペルシア語の原文さえも引用して、古きイランの詩人たちを推称した。彼は言つた——「ペルシア人は五世紀間の数多い詩人の中で、特筆に値する詩人としてわずかに七人の名しか挙げないと言われている。しかし彼らが斥ける残余の詩人の中にさえも、私などよりは遙かに傑れた人々がたくさんいるのにちがいない」と。自負心の強いこの詩人にしてこの言^{げん}をなした、もつて傾倒のほどが知られよう。だが彼の挙げた七人の詩人の中にはわがオマル・ハイヤームの名は含まれていない。ゲーテはオマルをも『ルバイヤート』をも知らなかつたものと見える。ハイヤームの詩人としての名は昔も今もペルシアではすこぶる高い。だから田舎^{いなか}の農夫

でもその詩の一首や二首は知つてゐる。現代イラン人の書いた文學史にはオマルの名は八大詩人の中に數え上げられてゐる。それにもかかわらず、彼の詩に盛られた思想が、狂信的なイスラム教（回教）と相容れないばかりか、これを冒^{ぼうとく}瀆する性質さえ持つていたために、ペルシアにおけるイスラム教勢力が衰えた最近代にいたるまでは、文学史上でハイヤームの詩人的才能を讃^{たた}えた例はなかつたもので、したがつてヨーロッパのペルシア学者も、フイツジエラルドや彼にオマルを推称した友人の東洋学者以前には、あまり『ルバイヤート』に注意を払わなかつた。そういうわけで、一八三二年に死んだゲーテとしてはフイツジエラルドの翻訳（一八五九年出版）に接する機会はもちろんなかつたし、またそれ以

前のドイツ語訳によつてハイヤームを知るという機会もなかつた。彼はまさに「私などよりは遙かに傑れた人々がたくさんいるのにちがいない」と予期したとおり、最も傑れた詩人の一人を逸したわけである。

自ら挙げた七人のペルシア詩人中の一人で、十四世紀に生きていたハーフェズのペシミズム溢れる抒情詩から、ゲーテは多大の影響を受けたと言われている。もしも彼にしてハーフェズの創作上の先師であつたオマル・ハイヤームを知つていたならば、この東方に深く憧^{あこが}れた詩人の『西東詩集』には、さらに色濃いオマル的な懷疑の色調が加えられたかも知れない。

本書に収めた一四三首はペルシア語の原典から直接訳したもので、テクストにはオマルの原作として定評のあるものだけを厳選し、また最近のイランにおける新しい配列の仕方に従つて、「解き得ぬ謎」^{なぞ}、「生きのなやみ」、「太初のさだめ」^{はじめ}、「万物流転」^{ばんぶつるて}、「無常の車」、「ままよ、どうあらうと」、「むなしや」、「一瞬をいかせ」^{ひととき}の八部に分類した。もちろんハイヤームが最初の写本を友人に示した当時にはこのような配列順序にはよらなかつたであろう。しかも彼自身の配列方法は今では不明であるし、普通の写本のようにイロハ順で漫然と並べるよりも、内容の類似点を捉えたこの配列の方が遙かに合理的だと考える。各行詩に附した番号はこの分類にはかわりなく、全体に通ずる

通し番号である。オマルのものかどうかなお多少疑いの余地あるものは冒頭の番号を（ ）で包んだ。で包んだ。他はすべて彼の作として異論がない。

はじめ、フイツジエラルドの英訳をテクストとした 森 亮氏
 の傑れた訳業に啓発されて、全部 有明調ありあけの文語体で翻訳したが
 （解説二、「ルバイヤートについて」の項参照）、その後 佐藤春
 夫氏のすすめにより口語体に改めた。同氏の御親切に対して深謝
 するものである。なお挿絵は 小林孔こばやしこう 氏に負うところ大である。

昭和二十二年八月二十日

松戸にて

訳者

目次

あべがや

解^{ヤハ}得^{タク}ぬ^{ナシ}謎^{ナゾ} (1-15)

生きのなやみ (16-25)

はじめ
太初^{タキ}のやがたぬ (26-34)

ばんぶつるてん
万物^{モンブツ}流^リ転^{ヘン} (35-56)

無常の車 (57-73)

ああよ、さくわあべへぶ (74-100)

むなしゃも (101-107)

—^{ひととき}
瞬ひとときをいかせ (108-143)
註

解き得ぬ
謎なぞ

1

チユーリップのおもて、糸杉のあで姿よ、
 わが面影のいかばかり麗うるわしかろうと、

なんのためにこうしてわれを久遠の絵師は
 土のうてなになんか飾つたものだろう？

2

もともと無理やりつけ出された世界なんだ、

生きてなやみのほか得るところ何があつたか？

今は、何のために^{きた}来り住みそして去るのやら
わかりもしないで、しぶしぶ世を去るのだ！

3

自分が来て宇宙になんの益があつたか？

また行けばとて格別変化があつたか？

いつたい何のためにこうして来り去るのか、

この耳に説きあかしてくれた人があつたか？

魂よ、謎を解くことはお前には出来ない。

さかしい知者*の立場になることは出来ない。
せめては酒と盃でこの世に樂土をひらこう。

あの世でお前が樂土に行けるときまつてはいない。

生きてこの世の理を知りつくした魂なら、
死してあの世の謎も解けたであろうか。

今おのが身にいて何もわからないお前に、
あした身をはなれて何がわかるか？

(6)

いつまで水の上に瓦かわらを積んで＊おれようや！
仏教徒や拝火教徒の説にはもう飽あきはてた。
またの世に地獄があるなどと言うのは誰か？
誰か地獄から帰つて來たとでも言うのか？

創世の神秘は君もわれも知らない。

その謎は君やわれには解けない。

何を言い合おうと幕の外のこと、

その幕がおりたらわれらは形もない。

8

この 万象ばんしよう の海ほど不思議なものはない、

誰ひとりそのみなもとをつきとめた人はない。

あてずつぽうにめいめい勝手なことは言つたが、

真相を明らかにすることは誰にも出来ない。

9

このたかどのを宿とするかの天体の群

こそは博士らの心になやみのたね

だが、心して見ればそれほどの天体でさえ
揺られてはしきりに頭を振る身の上。

10

われらが來たり行つたりするこの世の中、
それはおしまいもなし、はじめもなかつた。

答えようとて誰にはつきり答えられよう——

われらはどこから来てどこへ行くやら？

11

造物主が万物の形をつくり出したそのとき、
なぜとじこめたのであろう、滅亡と不足の中に?
せつかく美しい形をこわすのがわからない、
もしまだ美しくなかつたらそれは誰の罪?

12

苦心して学徳をつみかきねた人たちは

「世の燈明*」と仰がれて光りかがやきながら、
闇^{やみ}の夜にぼそぼそお伽^{とぎ}ばなしをしたばかりで、
夜も明けやらぬに早^はや燃えつきてしまつた。

(13)

この道を歩んで行つた人たちは、ねえ酒^{サーキイ}姫^{*}、

もうあの誇らしい地のふところに臥したよ。
酒をのんで、おれの言うことをききたまえ——
あの人たちの言つたことはただの風だよ。

(14)

愚かしい者ども知恵ちえの結晶をもとめては
大空のめぐる中でくさぐさの論を立てた。
だが、ついに宇宙の謎には達せず、
しばしたわざとしてやがてねむりこけた！

綺羅星の空高きいる牛——金牛星、

地の底にはまた大地を担う牛＊もいるし、

さあ、理性の目を開き二頭の牛の

上下にいる驢馬の一群を見るがよい。

生きのなやみ

思いどおりになつたなら来はしなかつた。

17

今日こそわが青春はめぐつて來た！

酒をのもうよ、それがこの身の幸だ。

たとえ苦くても、君、とがめるな。

苦いのが道理、それが自分の命だ。

16

思いどおりになるものなら誰たが行くものか？

この荒家あばらやに来ず、行かず、住まずだつたら、

ああ、それこそどんなによかつたろうか！

18

来ては行くだけでなんの甲斐かいがあろう？

この玉の緒の切れ目はいつたいどこであろう？

罪もなく輪廻りんねの環わの中につながれ、

身を燃やして灰はいとなる煙はどこであろう？

ああ、空しくも齡をかさねたものよ、
いまに大空の利鎌とがまが首を搔かくよ。

いたましや、助けてくれ、」の命を、
のぞみ一つかなわずに消えてしまつよー。

(20)

よい人と一生安らかにいたとて、
一生の世の榮耀えようをつくしたとて、

所詮しょせんは旅出する身の上だもの、

すべて一場の夢さ、一生に何を見たとて。

21

歓樂もやがて思い出と消えようもの、

古き好よしみをつなぐに足るのは生きの酒のみだよ。

酒の器にかけた手をしつかりと離すまい、
お前さかづきが消えたつて盃だけは残るよ！

22

ああ、全く、休み場所でもあつたらいに、

この長旅に終点があつたらいに。

千年をへたときに土の中から

草のように芽をふくのぞみがあつたらいに！

23

二つ戸口のこの宿にいることの効果は
心の痛みと命へのあきらめのみだ。
生の息吹いぶを知らない者が羨うらやましい。

母から生まれなかつた者ゝも幸福だ！

(24)

地を固め天のぬぐりをはじめたお前は

なんという痛恨を哀れな胸にあたえたのか？

紅玉の唇や蘭麝の黒髪くろかみをどれだけ

地の底の小宮に入れたのか？

25

神のように宇宙が自由に出来たらよかつたろうに、
そうしたらこんな宇宙は碎きすぎてたろうに。
何でも心のままになる自由な宇宙を
別に新しくつくり出したろうに。

太
はじめ
のさだめ

まかせぬものは雇と命の短さ、

27

26

あることはみんな天そらの書に記されて、
 人の所業しわざを書き入れる筆もくたびれて＊、
 さだめは太初はじめからすつかりだまつっているのに、
 何になるかよ、悲しんだとてつとめたとて！

まかせぬものに心よせるな。

われも君も、人の掌ての中の蟻アリに似てて、
思いのままに弄もてあそばれるばかりだ。

28

嘆きのほかに何もない宇宙！ お前は、
追い立てるのになぜ連れて来たのか？
まだ来ぬ旅人も酌くむ酒の苦さを知つたら、
誰がこんな宿へなど来るものか！

おお、七と四*の結果にすぎない者が、
七と四の中に始終しじゅうもだえているのか?
千度ならず言つようになをのむがいい、
一度行つたら一度と帰らぬ旅路だ。

(30)

土を型に入れてつくられた身なのだ、
あらましの罪けがれは土から来たのだ。

これ以上よくなれとて出来ない相談だ、
自分をこんな風につくつた主が悪いのだ。

(31)

礼堂 * のともしび、火殿 * のけむりがなんだ。
天国の報い、地獄の責めがなんだ。

見よ、天の書を、創世の主は

あることはみんな初発^{はつ}の日に書いたんだ。

(32)

宇宙の真理は不可知なのに、なあ、

そんなに心を労してなんの甲斐かいがあるか？

身を天命にまかして心の悩みはすてよ、

ふりかかつた筆のはこび＊はどうせ避けられさいや。

33

天に声してわが耳もとに囁くささやよう――

ひためぐるこのさだめを誰が知つていよう？

このめぐりが自由になるものなら、

われやきにその目まぐるしさを逃のがれたらう。

34

善惡は人に生まれついた天性、

苦樂は各自あたえられた天命。

しかし天輪を恨むな、理性の目に見れば、

かれもまたわれらとあわれは同じ。

万ばん
物ぶ
流つ
転てん

ああ、掌しょう中ちゅうの珠たまも碎けて散つたか。

36

若き日の絵巻は早も閉じてしまつた、
 命の春はいつのまにか暮れてしまつた。
 青春という命の季節は、いつ来て
 いつ去るともなしに、過ぎてしまつた。

35

血まみれの肺腑はいふは落ちた、死魔の足下。

あの世から帰つた人はなし、きく由よしもない——

世の旅人はどこへ行つたか、どうなつたか？

37

幼い頃には師について学んだもの、
長じては自ら学識を誇つたもの。

だが今にして胸に宿る辞世の言葉は——

水のごとくも来たり、風のごとくも去る身よ！

同心の友はみな別れて去つた、
死の枕べにつぎつぎ倒れていつた。
命の宴うたげに酒盛りをしていたが、
ひと足さきに醉魔のとりことなつた。

天輪よ、滅亡はお前の憎しみ、
無情はお前ひゞら日頃のつとめ。

地軸よ、地軸よ、お前のふところの中にはこそは
かぎりなくも秘められている尊い宝＊！

40

日のめぐりは博士の思いどおりにならない、
天宮など七つとも八つとも数えるがいい。
どうせ死ぬ命だし、一切の望みは失せる、
塚蟻づかありにでも野おおかみの狼おおかみにでも食われるがいい。

41

一滴の水だつたものは海に注ぐ。

一握の塵ちりだつたものは土にかえる。

この世に来てまた立ち去るお前の姿は

一匹の蠅はえ——風とともに来て風とともに去る。

(42)

この幻の影が何であるかと言つたつても、
真相をそう簡単にはつくされぬ。

水面に現われた泡沫ほうまつのような形相は、

やがてまた水底へ行方^{ゆくえ}も知れず没する。

43

知は酒^{しゅ}盃^{はい}をほめたたえてやまず、
愛は百度^{ひたい}もその額^{ひたい}に口づける。

だのに無情の陶器師^{すえし}は自らの手で焼いた
妙なる器^{たえ}を再び地上に投げつける。

44

せつかく立派な形に出来た酒盃なら、

毀すのをどこの酒のみが承知するものか？

形よい掌をつくつてはまた毀すのは

誰のご機嫌とりで誰への嫉妬やら？

45

時はお前のため花の装いをこらしているのに、

道学者などの言うことなどに耳を傾けるものでない。

この野辺のべを人はかぎりなく通つて行く、

摘むべき花は早く摘むがよい、身を摘まれぬうちに。

46

この永遠の旅路を人はただ歩み去るばかり、
帰つて来て謎なぞをあかしてくれる人はない。

気をつけてこのはたごやに忘れものをするな、
出て行つたが最後二度と再び帰つては来れない。

47

酒をのめ、土の下には友もなく、またつれもない、

眠るばかりで、そこに一滴の酒もない。

気をつけて、気をつけて、この秘密 人には言うな——

チューリップひとつたび萎めば開かない。

(48)

われは酒屋に一人の翁おきなを見た。

先客の噂うわさをたずねたら彼は言つた——

酒をのめ、みんな行つたきりで、
一人として帰つては来なかつた。

七

幾山川を越えて来たこの旅路であった、
どこの地平のはてまでもめぐりめぐつた。
だが、向うから誰一人来るのに会わず、
道はただ行く道、帰る旅人を見なかつた。

六

われらは人形で人形使いは天さ。

それは比喩ひゆではなくて現実なんだ。

この席で一くさり演技わざをすませば、
一つずつ無の手管てばこに入れられるのさ。

51

わかれらの後にも世は永遠につづくよ、ああ！

わかれらは影も形もなく消えるよ、ああ！

来なかつたとてなんの不足があろう？

行くからとてなんの変りもないよ、ああ！

52

土の裾しとねの上よこたに横よこたわつて いる者、

大地の底にかくれて見みえない者。

虚無の荒野をそぞろ見みわたせば、

そこにはまだ来くない者と行ゆつた者だけだよ。

53

人呼んで世界と言いう古いびた宿場は、

昼と夜との二色の休み場所だ。

ジャムシード*らの後裔こうえいはうたげに興きじ、

バハラーム＊らはまた墓に眠るのだ。

54

バハラームが酒盃を手にした宮居は
狐の巣、鹿のすみかとなりはてた。

命のかぎり野驥を射たバハラームも、
野驥に踏みしだかれる身とはてた。

55

67

廃墟と化した城壁に鳥がとまり、
からす

爪の間にケイカーウス*の頭こうべをはさみ、

ああ、ああと、声ひとしきり上げてなく――

鈴の音*も、太鼓たいこのひびきも、今はどこに？

56

天に聳そびえて宮殿は立つていた。

ああ、そのむかし帝王がしゆつぎよ出御の玉座、

名残りの円蓋えんがいで数珠じゅずかけ鳩ぱとが、

何処クークー、何処クークーとばかり啼ないていた。

無常の車

地の表にある一塊の土だつても、

(58)

君も、われも、やがて身と魂が分れよう。
塚つかの上には一基もとずつかわらの瓦かわらが立とう。

そしてまたわれらの骨が朽くちたころ、
その土で新しい塚の瓦が焼かれよう。

かつては輝く日の面おも、星ひたいの額ひだいであつたろう。
袖そでの上の埃ほこりを払うにも静かにしよう、

それとても花の乙女おとめの変え姿よ。

59

人情こころ知る老人よ、早く行つて、
土ふるいの小童の手を戒めてやれ、
パルヴィイーズ*の目やケイコバード*の頭を
なぜああ手あらにふるうのかえ！

朝風に薔薇の蕾はほころび、
鶯も花の色香に酔い心地。

お前もしばしその下蔭で憩えよ。

そら、花は土から咲いて土に散る。

雲は垂れて草の葉末に涙ふる、

花の酒がなくてどうして生きておれる？

今日わが目をなぐさめるあの若草が
明日はまたわが身に生えて誰が見る？

62

新 春 * ノールーズ

雲はチユーリップの面に涙、
さあ、早く盃に酒をついでのまぬか。

いま君の目をたのします青草が

明日はまた君のなきがらからも生えるさ。

63

川の岸べに生え出でたあの草の葉は
 美女の唇から芽を吹いた溜め息か。
 一茎の草でも蔑んで踏んではならぬ、
 そのかみの乙女の身から咲いた花。

64

酒のもう、天日はわれらを滅ぼす、
 君やわれの魂を奪う。
 草の上に坐つて耀う酒をのもう、

どうせ土になつたらあまたの草が生える！

(65)

ありし日の宮居みやいの場所で或ある男が、

土を両足で踏みつけた。

土は声なき声上げて男に言つた――

待てよ、お前も踏まれるのさ！

よき人よ、盃と酒壺さかつぼを持つて来い、

水のほとりの青草の茂みのあたり。

そら、めぐる車＊は月の面おも、花の姿を

くりかえし盃にしたり、また壺にしたり。

67

昨夜酔しわざうての仕業しわざだつたが、

石の面もに素焼の壺つぼを投げつけた。

壺は無言の言葉ことばで行つた——

お前もそんなにされるのだ！

68

なんできがれ＊がある、この酒甕に？
盃にうつしてのんで、おれにもよこせ、

さあ、若人よ、この旅路のはてで

われわれが酒甕とならないうちに。

(69)

昨日壺をつくる所へ立ちよつたら、

壺つくりは土をこねてしきりに腕をふるつていた。
盲の人は気もつかなかつたろう、しかし
その手の中におれは^な生き人の土を見た。

(70)

壺つくりよ、心あるならその手を休めよ、
尊い土に無礼なことはやめよ！

ファレイドゥーン＊の指やケイホスロウ＊の掌を
ろくろに取つてどうしようてんだよ？

71

壺つくりの仕事場へ来て見れば、

壺つくり朗らかにろくるをまわしては、
みかどの首もこじきの足もざつちやに、
手に取つてつくるは壺の首と足だ。

72

この壺も、おれと同じ、人を恋う嘆きの姿、

黒髪に身を捕われの境涯か。

この壺に手がある、これこそはいつの日か
よき人の肩にかかつた腕なのだ。

二三

壺つくりの仕事場に昨日よつて見ると、

千も二千もの土器かわらけがならべてあつたよ。

そのおののが声なき言葉でおれにきくよう——

壺つくり、売り手、買い手は誰なのかと。

まあよ、どうあらうと

74

マギイ*の酒に酔うたとならば、正^{まさ}にそうさ。
 異端邪教^{いたんじやきょう}の徒というならば、正にそうさ。

しかしあがふるまいを人がどんなにけなしたとて、
 われはどうなりもしない、相変らずのものさ。

75

わが宗旨はうんと酒のんでたのしむこと、

わが信条は正信と邪教の争いをはなれること。

久遠の花嫁*に欲しい形見は何かときいたら、
答えて言つたよ——君が心のよろこびをと。

76

身の内に酒がなくては生きておれぬ、

葡萄酒ぶどうしゅ なくては身の重さにも堪えられぬ。

酒さけ 姫き がもう 一杯いつぱい と差し出す瞬間の

われは奴隸どれいだ、それが忘れられぬ。

今宵こよいまたあの酒壺を取り出してのう、
そこばくの酒に心を富ましめよう。

信仰や理知の束縛きずなを解き放つてのう、

葡萄樹の娘*を一夜の妻としよう。

(78)

死んだらおれの屍しかばねは野邊のべにして、
美酒うまざけを墓場の土にふりそそいで。

白骨が土と化したらその土から
瓦を焼いて、あの酒甕の蓋にして。

(79)

死んだら湯灌は酒でしてくれ、

野の送りにもかけて欲しい美酒。

もし復活の日ともなり会いたい人は、
酒場の戸口にやつて来ておれを待て。

(80)

墓の中から酒の香が立ちのぼるほど、

そして墓場へやつて来る酒のみがあつても
その香に酔い痴よれて倒れるほど、

ああ、そんなにも酒をのみたいもの！

81

尊い命の芽を摘みとられる日、

身体の各部がちりぢりに分れる日、

その土でもし壺を焼いたら、さつそく

酒をついでよ、息を吹きかえすに。

(82)

命の幹が根を掘られて、
死の足もとにうなじをたれよう日、
身の土だけは必ず酒の器に焼いてくれ、
しばらくは息をつこう、酒の香に。

(83)

愛しい友よ、いつかまた相会うことがあつてくれ、
酌み交わす酒にはおれを偲んでくれ。

おれのいた座にもし盃さかずきがめぐつて来たら、
地に傾けてその酒をおれに注そそいでくれ。

(84)

あのしかつめらしい分別ふんべつのとりことなつた

人たちは、あるなしの嘆きの中にむなしく去つた。
気をつけて早く、はやく葡萄の古酒を酌くめ、
愚か者らはまだ熟うれぬまに房を摘まれた。

(85)

法官ムフテイよ、マギイの酒にこれほど酔つても
おれの心はなおたしかだよ、君よりも。

君は人の血、おれは葡萄の血汐ちしおを吸う、
吸血の罪はどちらか、裁けよ。

(86)

或る淫れ女たわめに教長シャイク*の言葉——氣でも触れたか、

いつもそう違った人となぜ交わるか？

答えに——教長シャイクよ、わたしはお言葉のとおりでも、

あなたの口おこなと行いは同じでしようか？

(87)

恋する者と酒のみは地獄に行くと言う、
根も葉もない 嘘たわごと言にしかすぎぬ。

恋する者や酒のみが地獄に落ちたら、

天国は人影もなくさびれよう！

88

天国にはそんなに美しい天女がいるのか？
酒の泉や蜜^{みつ}の池があふれてるというのか？
この世の恋と美酒^{うまざけ}を選んだわれらに、
天国もやつぱりそんなものにすぎないのか？

(89)

天女のいるコーサル河＊のほとりには、
蜜、香乳と、酒があふれているそうな。

だが、おれは今ある酒の一杯を手に選ぶ、
現物はよろずの約にまさるから。

(60)

エデンの園そのが天女の顔でたのしいなら、
おれの心は葡萄の液でたのしいのだ。
現物をとれ、あの世の約束に手を出すな、
遠くきく太鼓たいこはすべて音がよいのだ。

なにびとも樂土や 煉獄れんごくを見ていない、
あの世から帰つてきたという人はない。
われらのねがいやおそれもそれではなく、
ただこの命——消えて名前しかどどめない！

(92)

おれは天国の住人なのか、それとも
地獄に落ちる身なのか、わからぬ。

草の上の盆と花の乙女と長琴さえあれば、

この現物と引き替えに天国は君にやるよ。

93

この世に永久にどどまるわれらじやないぞ、
愛しい人や 美酒うまざけをとり上げるとは罪だぞ。

いつまで旧慣にとらわれているのか、賢者よ？
自分が去つてからの世に何の旧慣があろうぞ！

94

はじめから自由意志でここへ来たのではない。

あてどなく立ち去るのも自分の心でない。

酒姫 サーキイ よ、さあ、早く起きて仕度をなさい、

この世の憂いを生きの酒で洗いなさい。

95

バグダード*でも、バルク*でも、命はつきる。

酒が甘かろうと、苦かろうと、盃は満ちる。

たのしむがいい、おれと君と立ち去つてからも、

月は無限に朔望さくぼうをかけめぐる！

(96)

選ぶならば、酒場の舞い男カランドール*の道がよい。

酒と樂の音と恋人と、そのほかには何もない！
手には酒盃、肩には瓶子へいしひとつすじに

酒をのめ、君、つまらぬことを言わぬがよい。

(97)

酒サーキイ姫 よ、寄る年の憂いの波にさらわれてしまつた、

おれの酔いは程度を越してしまつた。

だがつもる齡の盃になお君の酒をよろこぶのは、
頭に霜をいただいても心に春の風が吹くから。

(86)

一壺の紅の酒あけ、一巻の歌さえあれば、
それにただ命をつなぐ糧かてさえあれば、
君とともにたとえ荒屋あばらやに住まおうとも、
心は王侯スルタンの榮華にまさるたのしさ！

おれは有と無の現象あらわれを知つた。

またかぎりない変転の本質もとを知つた。

しかもそのさかしさのすべてをさげすむ、
酔いの彼方かなたにはそれ以上の境地があつた。

酒姫サーキイの心づくしでとりとめたおれの命、

今はむなしく創世の論議も解けず、

昨夜の酒も余すところわずかに一杯、
さてあとはいつまでつづく？ おれの命！

むなしさよ

時の中で何を見ようと、何を聞くようと、

102

101

九重の空のひろがりは虚無だ！

地の上の形もすべて虚無だ！

たのしもうよ、生滅の宿にいる身だ、

ああ、一瞬のゝの命とて虚無だ！

また何を言おうと、みんな無駄なこと。

むだ

野に出でて地平のきわみを駆けめぐらうと、
家にいて想いにふけろうと無駄なこと。

103

世の中が思いのままに動いたとてなんになろう?
命の書を読みつくしたとてなんになろう?

心のままに百年を生きていたとて、

更に百年を生きていたとてなんになろう?

(104)

地の青馬にうち跨つて いる 醉漢よいどれを見たか？

邪宗も、イスラム*も、まして 信仰や戒律まがどころか、

神も、真理も、世の中も 眼中まなこにないありさま、

二つの世にかけてこれ以上の勇者があつたか？

105

戸惑とまどうわれらをのせてめぐる宇宙は、

たとえてみれば幻の走馬燈だ。

日の燈火ともしびを中にしてめぐるは空の輪台、
われらはその上を走りすぎる影絵だ。

106

ないものにも掌ての中の風があり、
あるものには崩壊と不足しかない。
ないかと思えば、すべてのものがあり、
あるかと見れば、すべてのものがない。

107

世に生れて来た効果^{しるし}に何があるか？

生きた生命の結果として何が残るか？

饗宴^{ともしひ}の燭となつてもやがて消えはて、

ジャムの酒盃*となつてもやがては碎ける。

一ひと
瞬とき
をい
かせ

たのしくすぐせ、ただひとときの命を。

109

迷いの門から正信までは、ただの一瞬ひととき、
 懐疑の中から悟りに入るまでもただの一瞬ひととき、
 かくも尊い一瞬をたのしくしよう、
 命の実効じゆうしはわずかにこの一瞬。

108

ひとかけ
一片の土塊つちくれもケイコバードやジャムだよ。

世の現象も、人の命も、けつきよく

つかのまの夢よ、錯覚よ、幻よ！

110

大空に月と日が姿を現わしてこのかた
く
れ
な
い
紅の美酒うまざけにまさるものはなかつた。

腑に落ちないのは酒を売る人々のこと、

このよきものを売つて何に替えようとか？

月の光に夜は衣の裾すそをからげた。

酒をのむにあかるたのしい瞬間ときがあろうか？

たのしもう！ 何をくよくよ？ いつの日か月の光は

墓場の石を一つずつ照らすだらうや。

あすの日が誰にいつたい保証出来よう？

哀れな胸を今この時こそたのしくしよう。

月の君*よ、さあ、月の下で酒をのもう、
われらは行くし、月はかぎりなくめぐつて来よう！

113

あわれ、人の世の旅隊^{キヤラヴァン}は過ぎて行くよ。

この一瞬^{ひととき}をわがものとしてたのしもうよ。

あしたのことなんか何を心配するのか？

酒姫^{サーキイ}よ！

さあ、早く酒盃を持って、今宵^{こよい}も過ぎて行くよ！

114

東の空の白むとき何故なぜわとり雞けいが

声を上げて騒ぐかを知つてゐるか？

朝の鏡に夜の命のうしろ姿が

映つても知らない君に告げようとさ。

115

夜は明けた、起きようよ、ねえ酒サーキイ姫

酒をのみ、琴を弾け、静かに、しづかに！

相宿の客は一人も目がさめぬよう、

立ち去つた客もかえつて来ぬように！

116

わが心の偶像よ、さあ、朝だ、

酒を持って、琴をつまびき、うたえ歌。

千万のジャムシードやケイホスロウら
夏が来て冬が行くまに土の中！

117

朝の一瞬ひとときを紅くれないの酒にすゞそう、

恥や外聞の醜い殻を石に打とう。

甲斐のないそらだのみからさつさと手を引き、丈なす髪と琴の上にその手を置こう。

118

こころよい日和ひより、寒くなく、暑くない。

空に雲 花の面ほこりの埃ほこりを流し、

薔薇ばらに浮かれた鶯うぐいすはパハラヴィ語*で、

酒のめと声ふりしぶることしきり。

119

花のころ、水のほとりの草の上で、
 おれの手をとるこの世の天女二、三人。
 世のわざら
 煩いも天国ののぞみもよそに、
 盂にさても満たそう、朝の酒！

120

はなびらに 新ノールーズ
 の風はたのしく、

草原の花の乙女の顔もたのしく、

過ぎ去つたことを思うのはたのしくない。

過去をすて、今日この日だけすゞせ、たのしく。

121

草は生え、花も開いた、酒サーキイ姫よ

七、八日地にしくまでにたのしめよ。

酒をのみ、花を手折れよ、遠慮せば

花も散り、草も枯れよう、早くせよ。

122

新ノールーズ 春にはチューリップの盆上げて、
 チューリップの乙女の酒に酔え。
 どうせいつかは天の車が

土に踏み敷く身と思え。

123

すみれ
董は衣を色にそめ、薔薇の袂に

そよかぜが妙なる樂を奏でるとか、

もし心ある人ならば、玉の乙女と酒をくみ、
その盃を破るだろゝよ、石の面おもてに。

124

さあ、起きて、嘆くなよ、君、行く世の悲しみを。
たのしみのうちにすゞそう、一瞬ひとときを。

世にたとえ信義というものがあろうとも、
君の番が来るのはいつか判わからぬぞ。

125

大空の極きわみはどこにあるのか見えない。

酒をのめ、天そらのめぐりは心につらい。

嘆くなよ、お前の番がめぐつて來ても、
星もとの下誰はい。にも一度はめぐるその盃。

126

学問のことはすつかりあきらめ、

ひたすらに愛する者の捲毛まきげにすがれ。

日のめぐりがお前の血汐けしきを流さぬまに

お前は盆に葡萄の血汐を流せ。

127

人生はその日その夜を嘆きのうちに
すぐすような人にはもつたいない。
君の器が碎けて土に散らぬまえに、
君は器の酒のめよ、琴のしらべに！

(128)

春が来て、冬がすぎては、いつのまにか
人生の絵巻はむなしくとじてしまった。
酒をのみ、悲しむな。悲しみは心の毒、
それを解く薬は酒と、古人も説いた。

129

お前の名がこの世から消えないうちに
酒をのめ、酒が胸に入れば悲しみは去る。
女神の髪の束びんまた束を解きほぐせ、
お前の身が節ふしづし々解けて散らないうちに。

(130)

さあ、一緒にあすの日の悲しみを忘れよう、
ただ一瞬のこの人生をとらえよう。

あしたこの古びた修道院を出て行つたら、
七千年前の旅人と道連れになろう。

(131)

胸をたたけ、ああ、よるべない大空の下、

酒をのめ、ああ、はかない世の中。

土から生れて土に入るのか、いつそのこと、
土の上でなくて中にあるものと思おう。

132

心はたゞる、早くこの手に酒をくれ！
命、いのち、銀露のようにたばしる！
とらえないと青春の火も水となる。
さあ、早く物にくらんだ目をやませ！

酒をのめ、それこそ永遠の生命だ、
また青春の唯一の効果だ。

花と酒、君も浮かれる春の季節に、
たのしめ 一瞬を、それこそ真の人生だ！

酒をのめ、マハムード＊の栄華はこれ。
琴をきけ、ダヴィイデ＊の歌のしらべはこれ。

やきのこと、過ぎたことは、みな忘れよう
今やえたのしければよい——人生の目的はそれ。

135

あしたのことは誰にだつてわからない、
あしたのことを考えるのは憂鬱なだけ。
気がたしかならこの一瞬ひとときを無駄むだにするな、
二度とかえらぬ命、だがもうのこりは少い。

(136)

時のめぐりも酒や酒姫^{サーキイ}がなくては無だ、
イラク*の笛も節^{ふし}がなくては無だ。

つくづく世のありさまをながめると、

生れた得^{とく}はたのしみだけ、そのほかは無だ！

137

いつまで有る無しのわざらいになやんでおれよう？

短い命をたのしむに何をためらう？

酒盃に酒をつけ、この胸に吸い込む息が

出て来るものかどうか、誰に判ろう？

138

仰^{あおむ}向^{むけ}にねて胸^{むね}に両手^{りょうし}を合わさぬうち＊、
はこぶなよ、たのしみの足^{あし}を悲しみへ。

夜^よのあけぬまに起きてこの世の息^{いき}を吸え、
夜^よはくりかえしあけても、息^{いき}はつづくまい。

139

さあ、ハイヤームよ、酒に酔つて、
 チューリップのような美女によろこべ。
 世の終局は虚無に帰する。
 よろこべ、ない筈はずのものがあると思つて。

永遠の命ほしさにむさぼる」とく
 冷い土器に唇触れてみる。
 土器は唇かえし、謎の言葉で——
 酒をのめ、二度とかえらぬ世の中だと。

141

もうわざらわしい学問はすてよう、
 白髪の身のなぐさめに酒をのもう。
 つみ重ねて來た七十の^{とき}_{よわいつき}齡の盃を
 今この瞬間でなくいつの日にたのしみ得よう？

142

ぬぐる宇宙は廃物となつたわれらの体^{からだ}躯、

ジエイホンの流れ＊は人々の涙の跡、
 地獄というのは甲斐かいもない悩みの火で、
 極楽はゝゝらよく過く（）した一瞬ひととき。

143

いつまで一生をうぬぼれておれよう、
 有る無しの論議になど、ふけておれよう?
 酒をのぬ、こう悲しみの多い人生は
 眠るか酔うかしてすゞしたがよからぬ!

註

番号

4 知者——全智の神。

6 水の上に瓦を積む——意味のない妄想にふけること。

12 「世の燈明」——神学者に奉られた尊号。たてまつ13 酒姫——酒しゃくの酌じしゃくをする侍者。じしやそれは普通は女でなくて紅顔の美少年で、よく同性愛の対象とされた。15 大地を担う牛——イラン人は地球は円いものではなく、大海の中の大魚の上に跨るまたが大牛の背中にのつているものと考え

ていた。そして太陽は地球の周囲を廻転するものと考えられていた。

26 人の所業を書き入れる筆もくたびれて——イスラム教徒の信仰によると、創世の日に神の筆がすべての天命を神の書に記入し、また日ごろ人間の善業悪業をもいちいち記入して裁きの日に備えるといわれている。

29 七と四——七天と四元素。

31 礼堂——イスラム教徒の礼拝の場所。

〃 火殿——拝火教の聖火奉安所。

32 筆のはこび——宿命。

39 尊い宝——宝石とそして尊い人の骨と。

53 ジャムシード——詩人フェルドウシイの集成したイランの国民史詩『シャーナーメ』に伝わる帝王の名。「ジャムシード」は「日の王」を意味する。

〃 バハラーム——ササン王朝（二二六—六四二年）のバハラーム五世のこと。在位は四二〇—四三八年。夫人を伴つて野驥ノグを狩りしたことで有名。バハラーム・グールと綽名あだなされた。

55 ケイカーウス——神話時代のイランの第二王朝であるケイアニイ朝第二世の帝王で、太祖ケイコバードの子。

〃 鈴の音——古代イランでは、帝王の出御しゆつきよするときに鈴を振り、太鼓たいこを鳴らす習慣があつた。

59 パルヴィーズ——ササン王朝の帝王ホスロウ・パルヴィー

ズ（五九〇—六二八年）。

〃ケイコバード——神話時代のイランの第二王朝ケイアニイ朝を開いた。

62 新春——イランには古くから一種の太陽暦が行われ、春分の日、すなわち春の彼岸が一年のはじめとなつてゐる。この日は新年としてまた春の祭として祝われる。

66 めぐる車——天体の運行を陶器師のろくろにたとえたもの。

68 けがれ——イスラム教は酒をけがれあるものとして禁じている。

70 フアレイドゥーン——かつてのピシダーデイ王朝の末裔まつえい

としてイランを再興したと伝えられる勇士。

〃 ケイホスロウ——ケイアニイ王朝中興の英主。

74 マギイ——拝火教の司祭。イスラム教以前のイランの宗教は拝火教であつた。しかしそれはイスラム教徒にイランが征服されてから後は邪教として擯斥ひんせきされた。

75 久遠の花嫁——自然、人生。

77 葡萄樹の娘——葡萄の実からとつた酒。

86 教長——学識経験のすぐれたイスラム教徒の指導的な人物。

89 コーサル河——イスラム教徒の死後の天国にあるといわれる川の名。

95 バグダード——アツバス朝時代（七四九一一二五八年）のカリフの首都、当時イスラム文化の中心地であつた。のちイ

ラクの首府。

〃バルク——現在は北アフガニスタンの小都であるが、古代にはバクトリアの都として、また中世にはブハラやネイシャブルと並ぶ東ペルシアの中心地の一つとして文化の栄えた所。

96 舞い男——イスラム教の教団の一つに歓喜して踊り狂うことによつて神との合一の三昧境さんまいきょうを現出しようとするのがあるが、この教団に属する修道者がカランドールである。

104 イスラム——回教とも言う。マホメットのはじめた宗教。唯一神アッラーを信じ、日に五回の礼拝を行い、斎戒をし、喜捨を寄せ、メッカへの巡礼をするイスラム教徒は、イスラ

ムを唯一の正信と信じ、その他の宗教をすべて邪信と見てい
る。

107 ジャムの酒盃——ジャムシード王の七輪の杯。七天、七星、七海などに象つた七つの輪を有し、世の中の出来事はこ
と（）とくこれに映して見ることができたといわれる。

112 月の君——愛人を月になぞらえて呼んだ愛称。

118 パハラヴィ語——中世ペルシア語。イランがアラビア人
に征服される以前、三世紀から七世紀にかけてササン王朝時
代に用いられていた言葉で、その後上層階級には忘れ去られ、
わずかに下層の国民大衆の間に語りつがれていた。

134 マハムード——ガズニ王朝（九七七—一八六年）の英

主スルタン・マハムード（九九八一一〇三〇年）。インドを侵略して数多^{あまた}の財宝を掠^{りやくしゆ}取した。

〃 ダヴィデ——聖書に見えるイスラエルの王で『詩篇』の作者。イスラム教徒は彼を美声の歌手の典型と考えている。

136 イラク——メソポタミアとイランの一部を含む地方。

138 胸に両手を合わせ——永眠すること。

142 ジュイホンの流れ——オクサス河。アムダリアとも言う。

青空文庫情報

底本：「ルバイヤート」岩波文庫、岩波書店

1949（昭和24）年1月15日第1刷発行

1979（昭和54）年9月17日第23刷改版発行

1997（平成9）年7月7日第52刷発行

※註の見出しが、底本ではページですが、このファイルでは詩の
通し番号としました。

※「*」は注釈記号です。底本では、直前の文字の右横に、ルビ
のよう付いています。

入力：土屋隆

校正：高柳典子

2006年7月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

ルバイヤート

RUBAIYAT

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 オマル・ハイヤーム 'Umar Khaiyam

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>